ひょうご水百景

No.185　苅藻川（神戸市長田区）

～救護活動中の巡査父子が犠牲になった阪神大水害～

写真-1 桧川橋から苅藻川を撮影（2023年7月）

■ 管理が難しそうな苅藻川の上流部

上の写真-1 は、新湊川水系の右支川・苅藻川に架かる桧川橋（「架昭和 54 年３月」）から上流方向を撮ったものです。護岸沿いに張り付いた家屋を見ると護岸は民有なのか、もしそうであれば護岸が損壊したら復旧はどうするのか、などと気になってしまいます。この辺りは法定外河川（普通河川）なので、神戸市が管理しています。

苅藻川に架かる橋の名が「桧川橋」というのも気になります。その昔、苅藻川上流は「檜川」と呼ばれていて、これが桧川橋左岸側の町名「檜川町」として残り、橋名はこの町名に由来しているようです。なお、桧川橋のすぐ上流で川は二手に分かれていて、近くの交番にあった地図によると、左が苅藻川、右が檜川となっています。

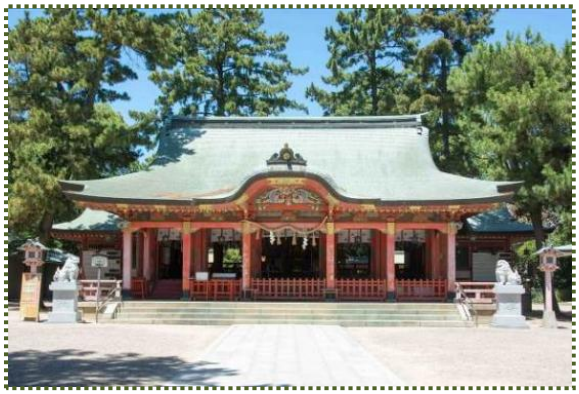

写真-2 長田神社

写真-3 長田神社の西を流れる苅藻川

また、長田神社（写真-2）の西を流れる苅藻川はかつて「宮川」と呼ばれていて、苅藻川に架かる橋には、第一宮川橋から第四宮川橋の名が付けられ、神社付近には「宮川町」という町名がついています。

■ 桧川橋下流に阪神大水害で殉職された巡査父子を顕彰する石碑が建つ

桧川橋の下流約 70m の所に西丸山橋という歩道橋があり、その上流左岸側に昭和 13（1938）年の阪神大水害で殉職された巡査父子を顕彰する「嗚呼福田君父子ノ碑」が建てられています。

７月５日の豪雨により、六甲山の各所で山津波（大規模土石流）が発生、河川は一斉に氾濫し多くの犠牲者が出ましたが、苅藻川も増水し、４戸が流失の危機にさらされていました。当時の林田警察署に勤務していた福田巡査が、堤防決壊の危機に 19 歳の息子を連れ住民救護にあたり多数の命を救ったものの、不幸にして家屋の倒壊に巻き込まれ父子は亡くなったという、当時の被害と悲しい出来事を後世に伝えています。

写真-4 西丸山橋から石碑を撮影

神戸市長田区檜川町 1 丁目の地に建立された石碑に刻まれた碑文は下記のとおりです（読みやすくするためカタカナ混じり文をかな混じり文に変えている）。

この石碑の背面には、「昭和十三年十月建之 林田警察署管内有志」と刻まれています。

写真-5 『嗚呼福田君父子ノ碑』

下記碑文に関連して、神戸大学附属図書館の新聞等アーカイブにある大阪朝日新聞の阪神大水害に関わる連載記事（1938.7.14-1938.7.24）から一部抜粋して紹介します。（痛ましい話です。）

「災害前日の四日朝車軸を流す豪雨に丸山旅館上の道路が早くも崩れはじめ高さ八間、長さ一町半にわたる山腹の道路が無残にも崩潰したのをトップとして崖崩れ、山津浪が相ついで住民を不安のどん底にたたき込んだ、町会長大本藤市氏始め青年団員、火防組合員は徹宵警戒にあたったが手の施し方がなく恐怖のうちに五日朝を迎えた 最も悲惨を極めたのは大日温泉前の神有電車（現・神戸電鉄）道の地崩れだった、地上から二十間余もある電車道が軌道の枕木を梯子のように取残したままアッという間もなく崩れ落ち住家六戸をすっぽりと埋めてしまった、前日から一睡もとらず警戒にあたっていた林田署丸山遊園地詰の福田秀蔵巡査（六十年）が青年団員として活躍していた愛児明生君（十九年）と相抱いたまま絶命していたのはこの時のことであった、苅藻川上流から押寄せる流木と土砂を呑んだ濁流は物凄い奔流となって川下いったいを襲い檜川（大日川のことか）との合流点明泉寺（みょうせんじ）橋下の名倉町、宮川町、長田町、西山町の川沿いの三千戸中過半数の千七百戸を水浸しとし殊に名倉町一丁目の川に面した家は床上五尺をすっかり土砂で埋めつくし埋没百戸、半壊五百戸を算え明泉寺橋から二町にわたる川床は並行する道路（バス道）より十尺も高い砂原と化してしまった」

『嗚呼福田君父子ノ碑』

兵庫縣巡査部長福田秀蔵君は鳥取縣の人なり 資性廉潔公に當りて敢て人に讓らず 大正四年本縣巡査を拝命し林田警察署に勤務す 在職二十有三年精励恪勤衆の儀範たり

昭和十三年七月五日神戸地方空前の水災に遭ひ 堤防決潰の危機に臨むや 君次子明生君を随へ奮然身を挺して救護に當り多数住民をして能く命を萬死の間に全うするを得しむ 不幸にして倒屋の圧する所と為り父子相抱いて殉す 行年実に六十 明生君僅（わずか）に十九 内務大臣君を以て警察官吏の亀鑑と為し功労記章を授與し其の偉功を表せらる栄の至（いたり）と謂ふへし 予深く父子の雙烈に感す乃ち貞石（碑石）に勒（ろく）し以て不朽に貽（のこ）す

昭和十三年十月
兵庫縣警察部長正五位勲四等

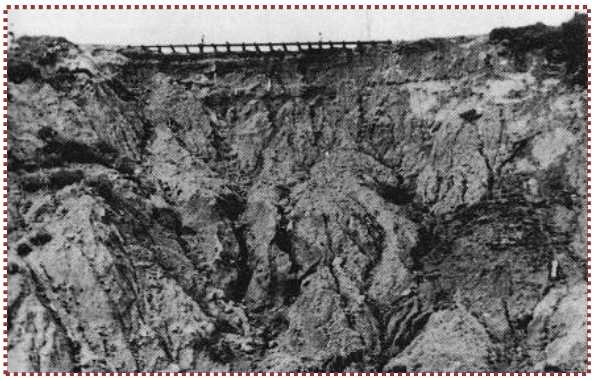

写真-7 丸山駅付近の崩落で軌道がむき出しになった神有電鉄
（『六甲山災害史』から引用）

写真-6 上記被災箇所と思われる箇所の現状（丸山駅北）

■ 丸山の南、明泉寺町に天然記念物の「丸山衝上断層」がある

神鉄丸山駅で降りて苅藻川に架かる丸山橋を渡り、約 500m 南へ行った所の長田区明泉寺町 3 丁目に「丸山衝上断層」の露頭があります。この断層は、京都大学助教授であった上治寅治郎（うえはるとらじろう）が昭和 7（1932）年 10 月 16 日に行った地質踏査の際に発見したもので、昭和 9（1934）年 3 月 25 日に行われた中村教授の踏査により「丸山衝上断層」と命名されました。当時近畿では存在しないと考えられていた逆断層であり、しかも断層面が低角度の衝上断層と呼ばれるものであったことが重視され、昭和 12（1937）年 12 月 21 日、「神戸丸山衝上断層」として国の天然記念物に指定されています。

令和 5（2023）年 8 月初旬に現地に行くと、法面対策工事を実施中（写真-9）で、ネットがかかっていたためわかりやすい写真を撮ることはできませんでしたが、説明板（写真-8）が神戸市により新調されていました。ただ、説明文には 3 ヶ所間違いがあり、そのひとつは右上の「時期」です。これは断層が生じた時期を記載すべきですが、なぜか花崗岩類が形成された時期になっています。断層が生じた時期は不明ですが、第三紀層を切っているので、3000 万年前～100 万年前以降ということになります。残る 2 ヶ所は誤字なので写真-8 の中で修正しています。

この衝上断層の発見は、六甲山成因論に大きな影響を与えました。

従来定説とされてきた地塁説は、六甲山の高い中央部を除いた南北の両側が陥没して低くなり、北側に落ちて谷状の凹地になったのが、箕谷から有馬、さらに生瀬、宝塚に至る低地帯であり、南側に落ちてできたのが神戸の市街地であり、ずり落ちずに残った高地が六甲山であるという考えです。

ところが、上治は丸山衝上断層の発見により、地塁説とは全く逆の、地殻にかかる側方からの圧力により、基盤が上向きに隆起し六甲山を形成したという新しい学説を発表しました。上治が、昭和 11（1936）年 2 月 1 日『地球』第 25 巻第 2 号に寄稿した論文「神戸市北西丸山衝上断層に就きて」の最後に、「この時代において、南または南東より横圧力を生ずべき地質運動の生じたることは疑う余地なく、近畿地方の山塊の生成を論ずる場合においても、単に垂直運動のみならず水平運動をも考慮すべき必要あるべきものと信ず」と述べています。

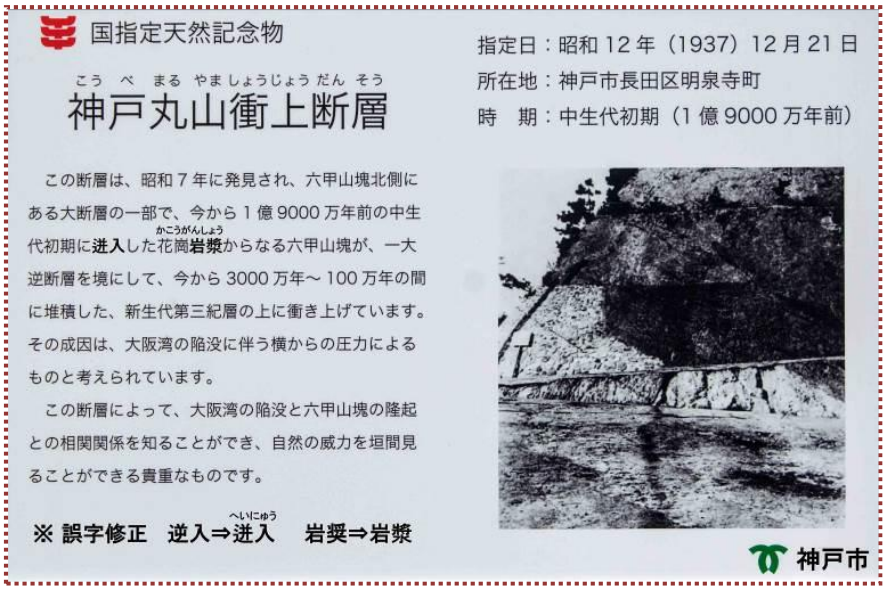

写真-8 「神戸丸山衝上断層」の説明板

これは天と地がひっくり返るような発想の逆転であったため、旧説を唱える人たちの感情的反発から、容易には認められませんでした。

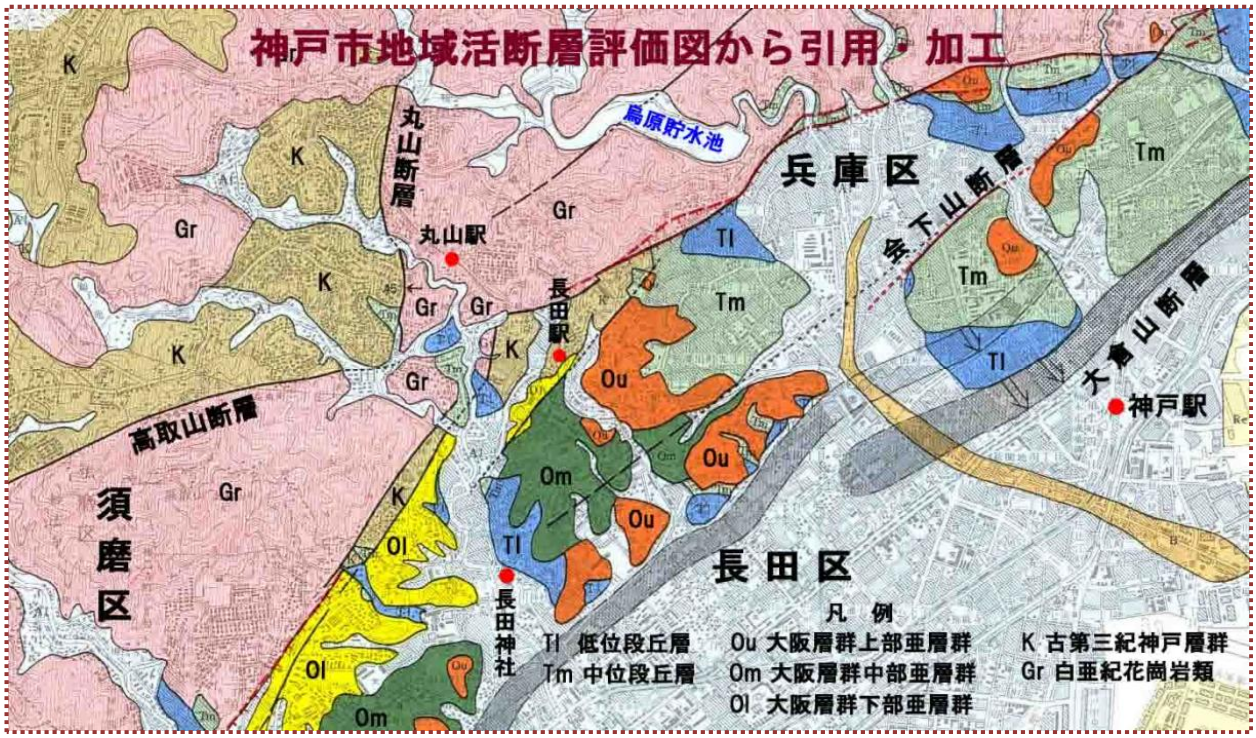

図-1 丸山断層周辺の地質図

兵庫県が平成８（1996）年に発刊した『兵庫の地質』によると、「当時、近畿地方の断層は大部分が正断層と考えられていましたが、上治による六甲地域の衝上断層発見は、日本における低角衝上断層としては最初のものであり、大きな注目を集めました。その象徴として丸山衝上断層が天然記念物に指定されたと思われますが、現在の知識から見ると六甲の断層中では小規模な部類に入るものであり、断層形成に関する考え方の変遷がうかがわれて興味深い。」と上治の考え方が至極当たり前のように記されています。

写真-10 は丸山衝上断層の別の露頭で、筆者も 30 年ほど前に訪れて間近で見ています。上が中生代白亜紀の花崗岩類（布引花崗閃緑岩）、下が新生代第三紀の神戸層群で、古い地層が新しい地層の上に乗り上げているのがよくわかります。

丸山周辺の５ヶ所の断層露頭が天然記念物に指定されていますが、住宅開発等に伴う法面工によって覆われ、現在露頭を見ることができるのは写真-9 の箇所だけのようです。

写真-9 工事中の国指定天然記念物「神戸丸山衝上断層」

写真-10 丸山衝上断層（『六甲山はどうしてできたか』から引用）

■ モノローグ

P.2 の阪神大水害の新聞記事に出てくる丸山遊園地や大日温泉といった施設名が、上治の論文に出てきます。「丸山遊園地として知られ、杖を曳くもの多し」、「聖天の小祠を祀る丸山小丘は衝上作用によって生じた丘陵なり」、「大日鉱泉湧出地」といった記述があり、調べてみるとどこにあったかわかりました。

「丸山遊園地」は、大正末頃から「神戸土地株式会社」が開発に乗り出し、昭和 7（1932）年に開園しています。しかし、太平洋戦争開戦の影響か 10 年ほどで閉園、跡地は一時「大阪俘虜収容所神戸川崎分所」になり、現在は神戸市総合療育センターになっています。

また、丸山橋近くにあった大日鉱泉湧出地は、後に大日温泉という銭湯が建てられ、平成 21（2009）年頃まで営業が続けられていたそうですが、現在は煙突も撤去され個人所有になっています。

写真-11 聖天の小祠を祀る丸山

写真-12 丸山駅の北を走る神戸電鉄

写真-13 丸山橋から旧大日温泉を撮影

カンナ

カンナ科カンナ属の植物の一群。多様な種類、園芸品種がある。夏から秋にかけて独特の形をした花を咲かせる。春に球根を植えると、夏から秋にかけて独特の形をした花を咲かせる。葉は、緑色のものと赤銅色のものがある。球根で殖やすが、暖かい地方では掘りあげる必要が無く、宿根草として扱うことができる。明泉寺町 3 丁目の苅藻川に設置された大日砂防堰堤（1950 年竣工：国管理）の堆砂敷に咲いていた。

写真-14 大日砂防堰堤の堆砂敷に咲くカンナ

【参考資料】

1 『大阪朝日新聞・阪神大水害に関わる連載記事』 神戸大学附属図書館・新聞等アーカイブ
2 『神戸市北西丸山衝上断層に就きて』 上治寅次郎・『地球』第 25 巻第 2 号 昭和 11 年 2 月
3 『神戸の自然シリーズ 21～六甲山はどうしてできたか』 前田保夫 平成元年
4 『兵庫の地質』 兵庫県土木地質図編纂委員会 平成 8 年 3 月
5 『丸山断層、カンナ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
6 『六甲山災害史』 （社）兵庫県治山林道協会 平成 10 年 8 月
7 『神戸市地域活断層評価図～災害の記録』 神戸市 HP 令和 5 年 2 月更新
https://www.city.kobe.lg.jp/a48501/bosai/prevention/foundation/afmap.html
8 『“神戸の奥座敷”に遊園地？当時の「丸山」の面影追う』 神戸新聞 平成 30 年 11 月 1 日
9 『それゆけ！土の調査隊（解説編）』 公益社団法人・地盤工学会関西支部

※発刊：令和 5（2023）年 11 月 『ひょうご水百景』No.185
改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』No.185